【論　文】

ベルトラン・ド・モーモールの秘教主義

――「黒箱の書類」に見るマルタン・デュ・ガールのニーチェ主義的思索――

店　村　新　次

一九八三年秋、ついにロジェ・マルタン・デュ・ガールの未完の遺作『モーモール』が、ニース大学の **André Daspre** 氏苦心の編輯のおかげで、ガリマール出版社刊行プレイヤード叢書の一巻（**Le Lieutenant-Colonel de Maumort**）として陽の目をみた。

この出版は、二〇世紀フランス文学史に一ページを加える一つの出来事であり、結果的に、探究家たちにさまざまな宿題を課する興味ぶかい企てとなったと評価してよいが、いっぽうでは、ある種の失望を否みえない側面をも呈していることは事実である。それは、小説そのものとして連綴的に作品化されているのが（**le text du roman**）、発端たる主人公モーモールの幼年期からその結婚まで、というのにすぎず（第一部から第三部。第三部には、ほかに主人公の姉アンリエットに関するエピソード二章も含まれている）、これに続く「モロッコ戦線 **Les campagnes en Maroc**」はいまだ下書きのままであり（第四部）、肝心の「第二次大戦 **Guerre mondiale**」（第七部）と「エピローグ **Epilogue**」も完全な形をなしていないという、あからさまな未完成品としての姿でたち現われたのだからである。

この書に収録されている主人公の略歴 (Résumé de la biographie de Maumort, p.3〜p.8) は、この大河小説の話の中軸をなすはずのものであるから、小説がもし完成されていたらこうなったであろうと思われる全体的形姿のあらましを、おおよそ粗筋的に示していると考えてよいのであるが、これによると、小説は一八七〇年七月の主人公の誕生から (実際にはさらに遡って主人公の祖先から書きおこされるのであり、これは小説テキスト冒頭で綿密に仕上げられている)、少年時代、青年時代、一八九四年のクレール・サン=ガル嬢との結婚 (出来上がっているのはここまで) のあと、アルジェリア駐屯部隊での軍人生活とふたりの息子の誕生があり、ドレフュス事件 (一八九八) を体験したのち、リオテー将軍に重用される参謀部の将校となり、妻を失ってやもめとなってから、モロッコ事件で活躍し (一九〇七―一四)、第一次大戦に参加して、みずからも負傷しふたりの息子も戦死させて (一九一四―一九)、両大戦間をル・サイヤンの館で孤独な老人として暮すが、第二次大戦を迎えて (一九三九―四五) 独軍に占拠された館でのドイツ軍人との同居生活ののち、自由地帯に逃がれてレジスタンス運動に加担したあと、終戦をへて一九五〇年十二月にこの世を去るまで、という、気も遠くなるほどの長大な構想を持っていたことになるのである。いうならばこの大作は、マルタン・デュ・ガールがすでに発表した二つの大小説『ジャン・バロワ』と『チボー家の人びと』を包摂して (ドレフュス事件ということで『ジャン・バロワ』、第一次大戦ということで『チボー家』を含むことになる)、なおその上に大詰めとして第二次大戦を踏まえるという、作者生涯の大遺言書ともいうべき、小説大全となるはずのものだったのである。これが、せいぜい主人公の結婚までとその他の幾つかの部分しか実現化されていないのであるから、些か慊焉たらざるものを覚えしめると言われてもいたしかたない。

しかし作品化されている部分、すなわち六六〇頁におよぶ第一部「La jeunesse」から第三部「Les Débuts dans

l'armée. Le mariage」までは、完成度たかい入念巧緻なものとして仕上がっている。これら完成部分の内容の概略は、私がすでに拙著『ロジェ・マルタン・デュ・ガール研究』のなかで紹介しておいたものとほぼ一致する。私は一九七七年に渡仏したときに、すでに『モーモール』がそこまでしか出来上がっていなかったことを知らされた。その年の春、編輯者アンドレ・ダスプル氏のトゥーロンの家に宿泊させてもらって、氏がパリ国立図書館から運んできた作者自筆原稿のコピーについて逐一説明してくれるのを筆記して帰り、それを私の著書のなかでいちはやく紹介したのであった。[註1] 今回出版を見たものとのあいだには、章分けなどにおいて多少の異同が起きているが、その構成諸要素はほぼ同一と言ってよい。ダスプル氏が正式に編輯にとりかかった際に、若干の組みかえが行なわれたのであろう。以上の完成部分を、便宜上「選定稿」、もしくはダスプル氏にしたがって、「小説テキスト le texte du roman」と呼ぶことにしよう。

さて、今回の出版においては、以上の小説テキストのほかに、それを補うものとして、二種類の草稿類が収録されている。その一つは、作者が小説形式への懐疑と模索の末に行きついた書簡体小説としての新たな試みの一端を示す「モーモール中佐の書簡 Lettres du Lieutenant-Colonel de Maumort」であり（これを含めて、作品化のあらゆる過程におけるさまざまの推移稿や異本を、選定稿とともに総称して、ダスプル氏はテクスト・ロマネスクと呼んでおり、それら推移稿・異本は編者の註（Notices, Notes et Variantes）に採り入れられている）、もう一つが本稿での私の対象となる「黒箱の書類 Les Dossiers de la Boite noire」である。

本稿は、「モーモール」という小説そのものについて論じようとするものではない。それは当然いつの日にかなされねばならぬ大きな宿題なのではあるが、いまだその作業に闇雲に突入する段階にいないので、ここでは、論題に示

すごとく、右に挙げた素材のうちでの最後のもの、すなわち「黒箱の書類」という付録的な資料の一部のみについて、しかもそれが今回印刷されて世に出た姿において、若干の観察を行なおうとするものである。今回陽の目をみた姿においてと、とくにその姑且について断わる所以は、「モーモール」の編輯はおそらく誰が行なっても困難を極める作業であったに違いないし、ダスプル氏のそれは、ともかくも不完全な材料によって、出来得るかぎり「モーモール」の全体像を浮かび上がらせようとした、称賛に価する苦心の編纂として結実しているのであるが、錯綜をきわめる複雑な素材からの取捨選択ということでは、それはあくまでもダスプル氏選定の「モーモール」であって、もし考証的に「モーモール」の全体を研究すると自称する者があるならば、どうしても、このプレイヤード『モーモール』のみならず、その丹念な「註」に導かれつつ、パリ国立図書館に残されている他の採用されざりし素材すべてを含めての、総括的で独自な研究がなされねばならないのであり、「黒箱の書類」についてもこの点が同様だからである。

マルタン・デュ・ガールは一九五八年八月二二日に他界したが、マリー・ルージエ女史が筆者に語ったところによると、小説家は病状急変の四八時間前そして死の八日前に、ルージエ女史に二つの容器に入れてあった『モーモール』の原稿類の最終的な処置について、相談を始めたという。間近い死への予感がそうさせたのかもしれない。と言うのは、マルタン・デュ・ガール自身は、たとえ間歇的にであろうとも、またほとんど完成の意図は放棄してであろうとも、この終生の宿願たるものと取り組むことは、けっして止めてはいなかったのだからである。マルタン・デュ・ガールはこのときルージエ女史に、その大部な草稿やノートや文献切り抜きの山があまりにも累積錯綜したものであるため、おそらく誰にも「整理不可能なもの（アンランジャーブル）」であろうという、絶望感に立って相談したらしい。

ルージエ女史はこのとき初めて、『モーモール』進捗の全容に接することができた。小説家はかなり以前から、ほとんど誰にもそれについて語ることもせず、原稿を読ませることもしなくなっていたのである。女史はさっそく草稿類を調べてみた。その結果ともかくも、小説家を勇気づけるために、「整理可能(ランジャーブル)です！」と報告したのである。このときの小説家の喜びようは格別であった、とルージエ女史は私に語ってくれた。やがて女史は二週間かけてこの草稿や関係書類を整理し、小説家の死後、これを国立図書館に預けることになる。

このように、他の遺稿類と異なって『モーモール』のそれは、マルタン・デュ・ガールの生前に図書館送りとなったのではなく、小説家の死の直後には、ル・テルトルの館に残されていた。父の死の枕辺から遠ざけられてブルターニュにいた娘のクリスチアーヌは、父の死の直後にル・テルトルに呼び寄せられたが、側近の人びとはクリスチアーヌが到着する前に、『モーモール』関係の書類を幾つかのトランクに分けて持ち出してしまっていた。そしてそれらは、クリスチアーヌの目に触れられぬまま、一九五八年八月二八日から一九五九年八月三日のあいだに、次つぎと図書館に納められたのである。ここが問題となる点で、生前に故人の意志で図書館に送られたものは図書館への寄贈となって、遺族の手を離れるが、死後に残されたものは遺産の一部と見做されると考え得るところに、のちに裁判沙汰に発展するクリスチアーヌの不満と主張の発する余地があったのである。

側近の人びと、つまり孫のダニエル・ド・コペやルージエ女史などが『モーモール』をクリスチアーヌの手に渡さずに図書館送りとしたのは、故人の意志を慮ってのことであった。マルタン・デュ・ガールが晩年、娘のクリスチアーヌを信頼していなかったことを知っていたからである。

『モーモール』関係の莫大な遺稿類のすべては、一つの頑丈な鉄製の将校用行李に入れられて、国立図書館に引き渡された。ダスプル氏は、これが、軍人であった小説主人公モーモールの生涯に関する書類にいかにもふさわしい容器といえよう、と述べている。[註2]

その遺草全体は大きく二つに分類され、その一方であるテクスト・ロマネスクのすべてとそれの製作に直接的に寄与した書類の大部分が、鉄製行李そのもののなかに収納され、片や、より基礎的で間接的な資料としての参考文献や覚え書の類が、別に、四〇センチ×五〇センチ×四〇センチという小さな黒い箱に集められていた。

その前者（テクスト・ロマネスクとそれの制作に直接関係ある書類）は、各章もしくはエピソードごとに集められて、紙ばさみや封筒に整理されており、そのそれぞれに、一つもしくは数種の小説テキストもしくはその異本や推移稿、計画表、年代表、場所の設定や人物土地についての試案、人物たちの伝記や容姿性格の研究などのほかに、書簡や新聞の切り抜きなども集められていた。

いっぽう「黒箱」には、白い文字で「B. N. R.M.G. *Maumort. Notes. Citations.* Au moins trois ans.」[註3]と書かれており、そのなかには、種々の基礎的な覚え書やカードと参考資料だけが入れられていたのである。

『モーモール』遺稿は、前述したように、マリー・ルージエ女史の分類によって整理されたものであり、それは、おおよそ小説家の死亡当時残されていた状態に近いものであった、とダスプル氏は考えている。小説家は、むしろ「黒箱」に収容されるに適した文献やノートの類のうちからも、多くのものを小説テキスト関係の各章や各エピソードの包みのほうにもまわしてあったのであり、ダスプル氏はそのような分類をそのまま尊重し、関係各章に添えてあったものについては、プレイヤード本のテキスト各章の註（Notices, Notes et Variantes）で提示もしくは説明して

いる。したがって、「黒箱」は基礎的・間接的な参考書類のすべてを含むものではない。

「黒箱の書類」は、番号を付された七〇冊の紙ばさみに分類され、そのうち五一冊には標題がついていた。そのうちから、ダスプル氏は三九の章に纏められるものを印刷せしめている。

前述したように、小説テキストは全体的構想の僅かの部分しか実現化していなかった。このため、あるいはこの「黒箱の書類」に、未実現部分がいかなるものになるべきであったかを示唆し、あるいは暗示してくれるものがあるのではないか、という期待がもたれるのも自然なことだと言わねばならない。しかし、もしその期待が、小説の爾後のプロットの具体的展開や、各所にはめこまれるエピソードの実質などについての暗示への期待であるならば、それを充分に満足させてくれるというものにはなっていない。元来、そのような種類の書類ではないのである。「黒箱の書類」は、たとえば、**1. Politique générale 2. Individu et collectivité… 5. Justice… 7. Communisme…** というような標題が示すように、その殆んどが、作者自身もしくは主人公モーモールの思想や性格の本質的なものに関係ある、理論的で抽象的で、ときには一般的で初歩的でさえある、作者の思索や瞑想を定着したメモの集積なのである。であるから、もちろん作者の小説制作の、そして中心的人物設定の基本精神を知るうえでの貴重な土台的資料となるものではあっても、小説の未完成部分がどのようなものとして具体的に進展させられるはずであったか、それを知らしめるようなものではないのである。

「黒箱の書類」の覚え書に読みとられる思索の多くのものは、マルタン・デュ・ガールという人物、そして彼の作品群をよく知る人にとっては、殊更に目新しいものではない。それらは、モーモールという中心人物にその性格や精

神傾向や思想を吹きこむための準備のための準備的な基礎作業の一つであるが（随所に *Maumort* とか *Maumort dira* とかいう頭書がなされている）、それはまた作者自身の精神傾向や思想をそのまま定着したようなところがつよく感じとられる（また随所に R・M・G という署名もある）。この小説に作者の「大遺言書」という表現を用いることを許すのも、このような小説主人公の人物設定のしかたがあればこそなのである。すなわちそこには、生まれながらの個人主義的性向、たやすく衆に加担することを嫌う徹底的自由と不羈の要求、暴力否定の絶対平和主義、そこから発する破壊的革命主義への警戒と、伝統・秩序のある種の価値肯定、いっぽうでは弁護の余地ない資本主義にかわるものとしての社会主義に拠りながらも、ソ連的社会主義体制を嫌悪する人間不信論、無神論の立場からのモラルの探求、そしてペシミズムと懐疑と不可知論という本源的立場……などが定着されているのであり、それらは、私たちがすでにこの作家のなかに見てきたものと大きく距たることはない。

しかしそのなかから、これまでに私たちの目にあまり触れることのなかった、特異な一つの用語が浮かび上がってくる。この言葉の新奇性がモーモールという人物に付託された新しい使命を暗示している、と思われてくる。「黒箱の書類」を総合して、モーモールという人物像を再構成するのはそれほど困難ではないが、ここでは紙数の関係もあるので、そうした復習的なものを含む本格的作業は後日に託し、右の暗示的な一つの用語から発して、それを敷衍することにより、作者自身と作中人物、そして小説自体のある側面に光をあててみたいと思うのである。その用語とは、秘教主義（**Esotérisme**）というものである。

まず最初に、モーモールの「秘教主義」は貴族主義と結びついた言葉であることを、55. の標題から理解しておこう（次ページ参照）。それは高貴さと自由と特権性と優越性を属性とする。（もっとも、私は本稿後段で、貴族主義と秘

教主義をある面で分離して考えることになるが)。

　念のために明らかにしておかねばならないのは、マルタン・デュ・ガールという作家が、これまでの作品のなかで、貴族的人物を中心的主人公にしたこともないし、また貴族性を作品の風土に主調として響かせたこともないという事実である。彼が執着し、反撥し、また批判の目をこらして追いつづけたのは、彼が出身したフランス・ブルジョワ階級という環境である。冷酷とまでに批判された農村民への嫌悪感（『老いたるフランス』）、工場労働者についてのある種の未来への期待にもかかわらず（書かれなかった『若きフランス』のこと）、ついに作品にそれを登場させることのなかった労働者階級との疎遠性、それらと同じくらいに、マルタン・デュ・ガールは貴族的世会をその作品から遠ざけていた。小説『生成』のなかに、ひとりの貴族の後裔が弱々しい姿を垣間見させるが、[註4] 閉鎖社会のなかでの同族結婚からくる類型衰弱の血をひいて、傷害者として生まれたその青年は、滅びゆく一つの階級の象徴のように描き出される、影薄い存在にすぎない。マルタン・デュ・ガールの関心はそれよりも、牢固としてフランス社会に根をはり、よかれあしかれこの国の実質を代表する、ブルジョワ階級に注がれてきたのであった。

　しかし、「黒箱の書類」に **55. Dispositions à l'aristocratisme** (ésotérisme) という章があり、また **2. Individu et Collectivité, 3 et 4. Liberté, 38. Tendances conservatrices de Maumort** などがそれを補っているように、マルタン・デュ・ガールの最後の大作の主人公モーモールは、貴族の血をひく軍人である。

　この「貴族」と「軍人」という二つの本質的要素が、小説主人公と作者自身とをある点ではっきりと区別してかかろうという、小説家の初源の意図をよく表わしている。マルタン・デュ・ガールはこの小説を企画した当初から、この措定を自分に再三言いきかせて、作中人物とみずからを混同しないよう細心の注意をはらう姿勢を示していた。

一九四一年七月一六日の『日記』にも、次のように書いている。

息の長い——というより果てしない——作品。そのなかで、以前のすべての企画、すべてのノート、世界情勢にたいする私個人の考えなど、に場所を与えてやれる（しかし私個人の考えは暗礁になるかもしれぬ。モーモールは彼自身で存在せねばならぬ。モーモールは私とは大いに異なっていなければいけない——その精神形成、貴族的遺伝、軍人生活などによって。すでにこれがどんな《大いなる人間像》になりうるかが目に見える。[註5]

余談になるが、『モーモール』の小説テキストを読んでみて驚かされるのは、その文章が、それ以前の既刊諸作品のそれと非常に異なっていることである。『チボー家』のニュートラルな自然主義的文体とも、『考いたるフランス』のアイロニカルで潑剌たる、自発的文体とも違っている。一口で言うとそれは、これまでに見たこともない、累々として遅滞する、重厚で、内観的で、息の長い文章というべきものになっている。そしてその重苦しく腰を落ちつけた文章が、作者の周到な意図的労苦の結果であることが見てとれるのである。すなわち『モーモール』におけるかぎり、マルタン・デュ・ガールは自分の文章とは異なる文体を作意的に創造して、貴族的家系に生まれた軍人である主人公、つまり自分とは出身も経歴も異なる人物が書き綴った「回想記」という真実感を、その語り口にも与えようとしたのであろう。

このような文体への格別の配慮も示すように、マルタン・デュ・ガールはモーモールという人物と自分とのあいだに、あるはっきりとした距離を持たせようとした。しかしそれにもかかわらず、「黒箱の書類」を検討すると、前述したように、モーモールの人物像に与えるべく準備された性格・思想形成の根底的諸要素は、マルタン・デュ・ガール自身に存したそれらの究極的総括である、という感を深くする。そのなかでただ一つだけ、モーモールに限って新

しく賦与されたものが、「秘教主義（エソテリスム）」という、これまでに顕示したことのない、おそらくは作者自身のなかに永年にわたって秘められてきたと思われる特性である。本稿がこの一点への集約によって始めようとするのは、このためである。

　さてそれでは、マルタン・デュ・ガールの言うモーモールの「秘教主義」とはいかなるものであろうか。それをまず「黒箱の書類」の **55. Dispositions à l'aristocratisme** （**ésotérisme**）のなかに拾ってみよう。

　前述したように、モーモールにおける「秘教主義」は貴族主義の一類縁、というより、そのもう一つの顔でさえある。そのためか、この章（55）では、それはつねに **Aristocratisme** という代置語で言い表わされている。まず **55. 3** ***Maumort. Aristocratie.*** の項において、モーモール自身の貴族主義についての考えかたは次のように書きとめられている。

> 　モーモールは、貴族階級出身ということに功徳があるなどとは信じていない。彼にとっての貴族階級とは、国家のエリート以外のものではあり得ず、功績により、知性により、仕事によって、最高の列に高められた人びとのことにほかならない。しかし、それにもかかわらず彼は、自分の出身という事実について、一種無意識の満足感、われにもなき誇らしさを抱いている。モーモール家に生まれたことになんの功徳もないことを知ってはいるが、そのことは彼の気に入っている。そのような幸運を持ったことに、満足しているのである。その幸運が自分にある種の性格的特徴を授けてくれたと思えるし、そうした特徴を彼は格別に評価しているからである。彼は自分の「価値」が、もしそれが実際にあるとするならば、それとは別のものに基づいていることもよく知っている。つまり、自分の受けた教育、自分がやった勉学、みずからの精神の陶冶、自分の道徳生活などである。勿論それはそうである。しかし彼は、自分の生まれがそれらの価値を得せしめるよう下拵えしてくれていた、と考えることにやぶさかではない。であるから彼は、自分の出身に感謝している。それを、等閑に付してよい財産、とみなすことは出来ない訳である。それは、遺伝に非常に近い何物かである。（生まれ、という）先天的な素質なのである。

モーモールにとっての貴族性は精神の高貴性ということであるが、これには生まれながらの素質というものがなければならず、またその素質を育てる環境がなければならない。その環境をつくるのは、多くの世代により獲得され蓄積された諸力の歴史をもつ家系である。であるから、パスカルの「貴族性というものは、一つの偉大なるものである。それは、一挙に二十年を節約するのと同じである」という言葉についてモーモールは、「この意味は、つつましい家柄出身の人間は、自分の価値を知らしめ、重要な職務を与えられるためには、貴族ならばその権力、人間関係、社会での地位、財力によって免除されている二十年の努力を積まなければならない、ということである」と解する(55. 1 *Maumort. Pascal. Aristocratisme*)。これに加えてモーモールは、「庶民階級から出身した人間には、その教育や教養や繊細さや価値の程度がどうあろうとも、どうしても何かしら未開発なものがつきまとう、と考える」のである。

55. 16 *Stendhal et les gens du peuple* (《*Brulard*》 p. 156) では、スタンダールの「私は民衆を愛し、圧迫者を憎む。しかし、民衆とともに生きねばならなかったら、それは私にとって体罰に等しいものとなるだろう」という文が引かれている。そしてモーモールは、「このように不条理で、非合法的で、弁護の余地ない社会的優越感が、最悪のエゴイズムに転ずる可能性もあったが、いっぽうで、私の場合にはとくに、反省や勉学や陶冶、つまり自分自身の陶冶や、内省へと私を導いてくれる私の自分自身への関心を育ててくれなかったかどうか、を自問さえするのである」と、俗世間的にはその優越意識への罪感を自認しつつも、主我的にはその価値を認めずにはいられないのである(55. 2 *Maumort Aristocratie*)。

では、その貴族性の本質は何であるのか。「モーモールにあっては、この貴族主義とはまさに、一つの生活様式

(***style de vie***) である」(55. 15)。その根本は「みずからをその本性において受け容れる」ことであり、「みずからの類型のままでありつづけ……その完成を追求すること。存在への私の権利を、毀損も贋造も加えることなく納得し、既成の因習や諸規則は私の個人的意識の完全性には害をもたらすことを感じ、社会の道徳的ドグマは、なんの効果もないばかりか、私の活力を無にする危険あり」と感じとること、である (55. 4 ***Aristocratisme***)。

すなわち、従うべきものは私の法則 (***ma loi***)、擁護すべきものは私の真理 (***ma vérité***)、追従すべきものは私のモラル (***ma morale***) であって、定冠詞のついた **la loi, *la* vérité, *la* morale** は、礼節や社会への譲歩からあえて侵犯しないだけのものにすぎない (55. 6 ***Aristocratisme, Maumort dira***)。そして「私」は「完全な自由」を主張する訳ではないが、「大きな、非常に大きな自由」を主張するのであり、「すべてが許される」とは考えないが、「意識して犯す場合は、すべてが許される」のでなければならない、と考える (55. 7 ***Maumort. Aristocratisme***)。

ところで、礼節は社会的には必要物であり、あらゆる必要物中の最たるものであるが、偽善のないところに礼節はないのであるから、偽善こそが人間関係において最も必要なものとなる。重要なのは、その偽善が意識的なものであることで、他人を欺くのでなく、他人を無益に傷つけないという意味だ、ということである (55. 9 ***Pensée de Maumort. Eloge de l'hypocrisie.*** R.M.G.)。

貴族主義 (秘教主義) として55. に纏められているものからその思想を要約すると、ほぼ以上のようになり、これを補うものとして、2. ***Individu et collectivité*** のなかに見られる、個人主義(***individualisme***)、利己主義(***égoïsme***)、個我的 (***personnel***) という三つの範疇をめぐっての覚え書が目につく。この三つの標記を見ただけで、その言わんとするところはおよそ想像がつくと考え得るかもしれないが、これらについての対比的な陳述はまさに個性的なも

のとなっている。

Individualisme はまず「善悪」というモラルの立場から眺められる。モラルには二種類あり、いわゆる社会的に規定された通常の道徳と、それとは別のもう一つのモラルが存在する。それは **individuelle** なモラルであって、通常のモラルより「定義することが困難であり、美学との関係なしとしないものである。」「社会を侵害することなく、また社会道徳の観点から合法的とみられる行為のうちにも、私が身中に持するこの個人的モラルの名において、みずからに禁ずる行為がある。それは何に基づくのか**?** 私自身の尊厳と私の個人的な名誉という、ある種の概念に基づいている。同様に、一般的にみれば社会に有害であっても、もし私がその行為のなかに私の個我的 (**personnel**) な意識に照らして非難さるべき何物をも見出せぬならば……そのような行為を私は自分に容認することができる。」(**2.2** ***Maumort. Bien et mal***)。これが秘教主義の一つの発露である。

しかし、個人主義は当然エゴイズムと隣りあわせている。「私は徹底した個人主義者であるから、他人のために最小限の犠牲をも払おうとしないエゴイストとして生きてきた (**27.** ***Egoïsme, Maumort, sur lui-même***)。しかし、それは実際にはエゴイズムではなくて、個我主義と呼ぶべきものなのである。「私はつねに確固として個我的 (***personnel***) であった。幸いなことに、このことは私がエゴイストであることを、いっさい意味しない。……誰もがエゴイストであるという尺度において、私もエゴイストであることは、よく知っている。だから、より明確に、次のように言おう。《私は一般人がそうでないのと同じくらいにエゴイストではないが、大部分の人びとより遥かに個我的であり、出来得るかぎりにおいて個我的なのである》と。」

では、個我的 (***personnel***) とはどのような態度を指すのか。それは、自分自身に沈潜し、自己に興味をもち、内

的自己の発展にのみ興味をもとうとする、徹底した一つの自我崇拝に基いて自己完成をめざす心的態度のことである。自分に問いかけ、自分が生きるのを見つめ、自分自身で自己充足し、他のすべてのものにまして、自己に興味をもつことである。「ここから、私の孤独への好み、自分自身との差しむかいへの生来の好みが発している。ここから、つねに日記をつけることへの欲求、私の想念や行為の記録が生じてくる」。軍人という職業を選んだのも、このためである。軍人は行動的生活を、受動的に、外部からの要請に従わせておいて、いっぽう内的生活としては、誰からも知られずに、孤独のうちに内的思索に耽り得るからである。知性で社会に幅をきかせるためとなら、作家か教授にでもなっていたほうがよいであろうが、どのような栄達よりも孤独を愛すればこそ、軍人になったのである。また軍人としての昇進をいっさい望まず、大佐どまりで退役したのもそのため、つまりみずからの個我的生活の欲求によるのである。妻を去るにまかせ、子供たちを妻の実家の養育に委ねたのも、そのためである。「孤独と内的対話 (**Solitude et dialogue intérieur**)、これが私の生活のすべてである……そして、私が私自身を通して到達しようと努めたもの、それは「人間」である」(2. 16 Pas *égoïste* mais *personnel. Maumort dira*)。この内的対話の奇癖を、モーモールは ***Ronronnement*** と呼ぶ (51. *Disposition à la méditation.* ***Ronronnement***)。

以上、二、三の章から「貴族主義(秘教主義)」についての記述を瞥見した訳だが、不思議なことに、55. の標題のみに **esotérisme** という語が括弧に入れて添えられているだけで(後になって付け加えられたものであろうか)、テキストのどこにも ***esotérisme*** という語は見当らず、ただその同義語として、***aristocratisme*** という語のみが用いられているのである。

これに反して、秘教主義(エソテリスム)については、むしろ選定された小説テキストのほうにははっきりとこの用語が現われており、

かなりのページを費やして、より明確にその内容が解説されているのが見られる。以下少しく長くなるが、小説テキストの冒頭の部分からその個所を引用してみよう。こうすることで、基礎的資料である「黒箱の書類」が、実際には作品にどのような寄与をしていたかという、この両者の関係を明瞭にさせる、副次的利益も得られると思う。すなわち、前掲「黒箱の書類」から概観した「貴族主義」と、次に訳出する小説テキスト中の「秘教主義」とを対照するならば、前述したように、「黒箱の書類」は、小説の未完成部分のプロットやエピソードのあるべき具体的展開を知らしめるものではないとしても、作者の小説主人公設定の基本精神を知るためには、これほど貴重な資料はないということが瞭然とするであろう。小説テキストのなかで、モーモールは次のように回想する。

　とりいそぎつけ加えておくが、そのような愚かしい階級(カースト)への尊重の念は、わたしの場合、ずいぶん早くからその対象を変えていた。なるほどわたしは自分の語彙のなかに、≪貴族階級≫という言葉をのこしてはいたが、それはまったくちがった内容をこめてのことだったのである。この言葉は、わたしの目に非常に早くから、そしてもっぱら、かならずしもその出身からくるのでない諸価値の全体を意味するようになっていた。つまりそれは、肉体的・精神的な美質の綜合というものであり、それらの美質のうちでも、わたしは、良い教育環境と財産的安定によってはぐくまれる、あの上品さ、あの物腰の優雅さ、あの洗練といったものに、たしかにある種の役割を認めはするのだが、そのさいにも、とくに高い地位は性格と知力とにおかれることになる――すなわち、確固とした精神、勇気、廉恥の心、厳しい良心、知的教育、独立不羈の判断力といったものである。

　そうだ、たしかにわたしは、一度たりとも貴族的身分というものに心惹かれたことがなかった。それどころか、その凡庸さから名誉ある家名を辱めるようなやからには、かえってつらい、またかえってきびしい判断をした。げんに、これは認めるほかはないのだが、旧家であるわが一族にしても、そのほとんどの家庭が、堕落した者や遊び人や愚か者を生みだす温床となってしまっている。真にその名にあたいする貴族とは、人間完成において高水準にたっした人のみのことであり、わたしはこの意味において≪貴族(ペルソヌ・ド・カリテ)≫という旧制度(アンシャン・レジーム)時代の言葉をもちいたい。もっとも、貴族への愚かしい偏見と同様に、平等主義という非現実的な偏見

からもわたしは遠くにいるのではあるが。ニーチェは、およそ人間類型の完成は貴族社会の産物だ、と断言している。この言葉はわたしには気に入っているが、わたしがそれをおぼえているのは、ただたんにそれが気にいっているからだけではない。歴史的にみた場合、この言葉には異論の余地がないからである。

もしわたしのなかに、階級意識という、なにか遺伝性の澱(おり)のようなものが残っているとするなら、それはおそらく、わたしがつねに抱いてきた、自分が「人とちがっている」と感じたり、そうありたいとねがうあの傾向というものであろう。それも、「人とちがっている」というこの言葉に、ある種の優越性のニュアンスを付与してのことだ、とわたしは認める。そうなのだ、慢心者のようなしゃべりかたをする危険をおかしても、これは認めざるをえない。――正直なところ、わたし自身はぜったいに慢心者でないと信じているのだが――、モーモール家のものが、みだりに、その家門に属しているという一事(いちじ)に帰してきたあの優越感に、このわたしもまたつらぬかれているのだ。それも、ごくおさないころからのことであり、しかも、わたしは、この優越感以上に本能的で抜きがたい信条をほかにはしらないのである…それは、どうすることもできないことなのだ。自分のなかに、人びとの尊敬にあたいする、一つの恵まれた人間的成功を見出すのである。ただしこの幸運には、いろいろな義務がふくまれている。そこでわたしは、その義務を果たすようつとめてきた。しかしこの幸運はまた、いくつかの権利をもさずけてくれるのだ（≪王の特権≫とでもいえる権利である）。そしてその権利を、ああ、やはりこのわたしも濫用してしまったことを、告白しなければならない。

そうした厚顔な態度は、きのうやきょうに始まったものではない。自分の場合が例外的なものかどうか、わたしにはわからない。自分ではそうは思わないのだが。とにかく、ずいぶん早く、まだ子どものころから、自分の人格というか、わたしの目にこの世の他のいかなるものよりも現実的で重要とみえた、≪自我≫というものへの、漠たる感覚を抱いていた。…

まだ学校にいたころのことだが、それまで知らなかったある単語を前にして、わたしはハタと虚をつかれる思いをした。その語はわたしに、思ってもみなかった、心やすまる展望を開いてくれ、わたしはただちにその語をわがものとしたのである。それは≪秘教的(エソテリック)≫という言葉であった。わたしの記憶が正しいとするなら、プラトンは、認識ということに、ちょうど初等教育と高等教育との違いにもひとしい、截然たるふたつの次元を識別している。すなわち、ひとつは、ごくふつうの知力あるものなら誰にでも理解できるありきたりの哲学で、もうひとつが、よりぬきの精神の人たちだけがもつ、より玄妙な哲学なのであり、これは、よほどの慎重さをもってしか伝えてはならぬものなのである。いいかえるならば≪秘教的≫哲学とでもいえるものであり、奥義につうじた少数の人だけにとってあるものなのである。

この発見にわたしは有頂天になった。それは、漠としたものではあるが、わたしの思春期の自尊心にふかく根をおろしたある観念、つまり、自分がエリートというか選ばれたものという観念と結びつくものだったのである。わたしのうちには、ある種の人間には——疑いもなくわたしはそのなかにはいると感じていたのだが——、その本性の美質のゆえに、自分固有の行動指針にしたがって、とはつまり、伝統的規則にしたがうことから当然免除され、法の規制をはなれて生きたり考えたりする権利があるのだ、という直観的確信があったのだった。……

わたしはいつも、自分の《秘教主義(エソテリスム)》を断固として隠しつづけてきた。それを告白したのは——ここでもまた例外的に——同じ奥義につうじたものか、同類のものにだけであった。ただし、そうした人には数多く出あってきた。むしろ、いままでに近づきえた優(すぐ)れた人たちのなかで、意識するとしないとにかかわらず《秘教信者》でないような人には出あわなかった、とさえいいたいほどである。それは、ずいぶん若いころ、伯父シャンボの取りまきのなかに入れられたとき、ただちにわたしが確かめえたことである。そこは、知的な社会であり、精神的貴族の世界であって、自由が横溢し、たちまちにわたしが居心地よく感ずることのできる場所であった。

そして士官学校にはいり、自分が軍人生活にはいろうとしていることを考えると、そうした貴族主義意識と人間階級づけの原則とが、心のうちでいっそう強められるのだった。(しかし軍隊においては、そこから生じる義務のほうが、権利よりはるかに重要なものとわたしには思われた。そこで、新参者の熱意からというか、知力や性格や行動が上官としての職責にあたいしないような先輩との出あい以上に、おどろかされるものはなかったのである。)

こうしてわたしの個人的生活全体が、一般法規のかなたにひろがるあの《無人地帯(ノーマンズ・ランド)》のなかで、すなわち、自由で風とうしよく《秘教的》で、ただしいっぽうではけわしく罠(わな)のはりめぐらされたあの空間において、誰はばかることなく、また悔恨の念もなしに、くりひろげられていったのだった。そこでは、あの秘密な貴族階級の成員たち、つまり、自分が並みの背たけではないことを知り、それを実感し、そのように努めてなろうとする人たちが育っていくのである。そしてここから彼らは、自分たちの自由の範囲と限界とをかってに決定するよう許されている、と考えているのである。いいかえれば、自分たちだけで条項をさだめた道徳的法典を守ればよい、と考えるわけなのだ。

その法典とはなんだったのか？　それについては、わたしの人生を語るうちに、どうしても説明しなければならなくなるだろう。だがいまは、モーモール家のはなしをすべきなので、脱線はこのへんでおしまいにしておこう。

以上により、モーモールの貴族主義と秘教主義がどのようなものか、おおよその姿が掴めたと考えられる。次に検討を要するのは、そうした特性とマルタン・デュ・ガールという小説家自身との関係である。もとよりマルタン・デュ・ガールは貴族の血をひいていない。また、彼がそれまでの他の作品のなかで貴族的環境を対象にしたこともなく、貴族性を漂わせたこともないという点については、すでに述べた通りである。

しかし、ここに一つの大きな問題が残される。それは、このように貴族性は彼の作品群から遠ざけられていたとしても、その一類縁であると同時に他の範疇に跨がるものでもある、「秘教主義」についてはどうであったか、という問題である。

秘教主義は高貴性と個我性と特権性と優越性を属性としてもつ。これには、秘教的次元におけるプラス面と世俗的な次元でのマイナス面があることは、引用したテキストに照らして理解がつく。意識がプラス面にまで充分浸透していない段階においては、世俗的マイナス面として、それは漠たる身分的特権意識とエリート的優越感情として現われるにとどまるであろう。ところでそのような段階の権化を、すでに私たちは『チボー家』前半のアントワーヌ・チボーに明瞭に見せられてきた。アントワーヌにおけるこのマイナスの面については、説明の要もないであろう。アントワーヌは貴族家系の出ではなく、ブルジョワ家庭の長子であるが、この自信にみちた男の短い生涯の前半に鼻もちならぬものとして付きまとう特性が、まさにエネルギッシュなブルジョワ階級出身者のエリート意識であり、特権的優越感情であった。それが秘教主義の未覚醒の段階にとどまっていたのは、ブルジョワ階級が、ニーチェの用語を藉りるならば、「中間種」であり、いまだ群居動物類型に属しているためである。はたせるかな、このブルジョワジーという中間種の役割について、「黒箱の書類」は次のように書く。

モーモールは言う。私はつねにブルジョワジーを弁護することを避けてきた。またいっぽうで、それを告発することもしなかった。私は、自分の生まれということから、ブルジョワ階級に存する凡庸なものを知っている。しかし、いっぽうで、そこに健康なものがあることも知っている。もしどうしてもブルジョワジーの立場を弁護しなければならないとするならば、それなくしてはどのような社会も均衡を維持し混乱を避けることのできぬ、秩序の諸原則にたいしてこの階級がもつある忠実さ、を力説することになろう……この階級の存在は、下層階級の奔放な食慾の破壊的勢力への、そしてさまざまな毛色の革命主義的空想家たちの神がかった狂熱への、平衡錘となってきた。それはおそらく、文化を一時的に救い、西洋にある高度な文明を許してきたと言えるだろう。しかし、その役割はおそらく終わっているのである（42. 3 Sur la bourgeoisie）。

体制順応型の保守主義者アントワーヌを、よく言いあてていないだろうか。アントワーヌは傲慢である。しかし前半の彼は、孤高を誇るほど高貴ではなく、いまだ凡庸である。しかし、その間にも、アントワーヌの優越性が「秘教主義」のいくつかの特性をすでに垣間見させていたことは、多くの徴候がこれを示していたのだが。

小説前半のアントワーヌはこのような段階にとどまる優越者の典型にされている訳であるが、その他の作品にも、世俗的意味では優越意識と評され得るものが滲み出ていることがある。私はかつて、自伝的短篇小説『ノワズモン＝レ＝ヴィエルジュ』について新批評がかった分析を試み、この作品の随所に優越感情を感じとらせる指標が見てとれることを敢えて指摘したことがある（『ノワズモン＝レ＝ヴィエルジュ試論』同志社大学外国文学会・外国文学研究第十四号）。これは作者の思いもかけぬ指摘であったかもしれない。「金色の靄のなかにみごとに集められている」遠い幼年期の平和でささやかな回想に過ぎないもののなかに、私がゆくりなくも優越意識を嗅ぎつけてしまったのは、おそらく行き過ぎという非難を受けてしかるべき業だったかもしれないのである。しかしいま、『モーモール』のなかに秘教主義なるものに付髄する一つの属性が顕然と現われているのを見るにいたって、私は、自分が試みた特殊な方法が優越

感情という点で大きく誤っていなかったことを知らされて、むしろみずから驚くのである。

『ノワズモン＝レ＝ヴィエルジュ』の場合には、そこにすけて見える優越感情は作者自身のものということになる。そして『老いたるフランス』はその農民悪徳の仮借ない剔抉ということで、しばしば作者の農民蔑視感情指摘の材料となる。しかし、これを身分的・生活的差別と考えるのは誤っている。この小説の人物たちのうち、農民はほんの僅かしかおらず、他は公務員、店主、職人など、さまざまの職業にわたっているのだからである。ここで槍玉にあがっているのは、僻地で硬化症にかかっている無知蒙昧の徒なのであり、人間精神貴賤の階序という観念からの最低級種なのである。

この違いを、チボー家のアントワーヌの変貌が私たちに教えてくれる。すなわち、ブルジョワにすぎないアントワーヌが、この世の生を禁じられて、純空の状態におかれると、精神の貴族性という階序の最高級種に高められ得るということである。『チボー家』前半におけるアントワーヌは、主として身分的優越意識というマイナスの感情をしか発揮できない状態にとどまっていて、無意識の真底に眠っていた彼の秘教主義は、ブルジョワ的環境の凡庸さという濁水に圧せられて、意識の水面に達することができなかった。彼の秘教主義の発現は、そして作者自身のそれの顕揚は、『エピローグ』におけるアントワーヌの変身を、そのコペルニクス的転回を、すなわち、アントワーヌの実生活の喪失による魂の純粋状態への浄化を待たなければならなかったのである。

戦場で毒ガスを吸って帰国した『チボー家』後半の軍医アントワーヌ、そして自分の命数があといくばくもないことを悟ったのちのアントワーヌが、『エピローグ』のなかで、世界と人類に想いを馳せつつ、ジャックの遺児ジャン＝ポールに書き残す手記は（まさにマルタン・デュ・ガールが孫のダニエル・ド・コペ氏に書き残すことになった『黒

箱の書類』と同様に)、いまや自覚された秘教主義の皆伝の書となってゆく。アントワーヌはジャン=ポールに、次のように打ち明ける。(以下『チボー家の人々』よりの引用は、山内義雄氏訳による)。

「自分の生涯の中で三度か四度、おれは自分が平素受けいれていた法則からはずれた領域、すなわち、そこには理性のおこなわれていない、ただ直感と衝動だけが支配しているような領域に飛びこんでいったことがある。それは、さわやかな、清朗な領域、《高度の無秩序》の領域。おれはそこにあって、おどろくほど孤独で、力に満ちあふれ、安心しきっている自分自身を感じたことだった。安心しきった? そうだ。おれはたちまち、(さて、このあとをどう結んだらいいかがむずかしい……)——こうでも言おうか、神にとっての純粋な《真理》(それは大文字で書かれた真理)とでもいったようなものに近づけたような気持ちになったのだから。そうだ、おれは、自分の知っているかぎりにおいて少なくも三度、はっきりそれと意識しながら、すべての人々がひとしく信じている道徳律というやつをふみにじったことがある。それでいて、おれは、なんの悔恨をも感じなかった。そういうまも、おれはきわめて平然として、すこしの悔恨の気持ちもなしに、そのことを思いだすことができるのだ。」(八月十四日)

神なきアントワーヌが「神にとっての純粋な真理」と言うとき、それは彼のうちに潜在した秘教主義が感得した宇宙の権力という真理であり、「なんの悔恨も感じなかった」と書くのは、アントワーヌがみずからの権力への意識を予感していたからである。そして、「事実、自分自身にたいする以外、義務などというものはないはずなのだ」(八月二十日)と書くアントワーヌは、マルタン・デュ・ガールが『黒箱の書類』のなかでしばしば責任(responsabilité)と呼んでいるものと同じものについて述べているのである。

アントワーヌは病室の窓のブラインドをあけて、ベッドのなかから美しい夏の夜空を凝視し、宇宙のなかにおかれた人間の無限小としての存在に想いを馳せる。

「天の川。これこそは無数の星、無数の太陽のこなであり、そうした天体のまわりを、たがいに何千万キロもへだたりながら、何十億という天体がまわっている！　それにあの星雲、そこからは、数しれぬ未来の太陽が巣立ってくる！　しかも天文学者たちの計算によれば、こうした密集した無数の世界も、あの無限の空間——そこでは、われらにその全部がわかっていない無数の放射、重力による無数の反作用が縦横に飛びかい、そのためにたえずふるえつづけているらしいエーテルの世界にくらべるとき、ほとんど無にひとしいものであり、ほとんど取るにもたらぬ小さな位置しかあたえられていないという。

こう書くだけで、すでに想像力はゆらめかずにはいられない。何やらたのしい目まいとでもいった感じ。今夜はじめて、そしておそらくこれを最後に、おれは自分の死について、一種の落ちつき、一種超然とした無関心な気持ちで考えることができた。苦悩から解き放たれ、そして、滅びゆく肉体にたいして、ほとんどどうでもいいといったような気持ちがする。おれというもの、それはまさに無限小な、そしてぜんぜんなんの興味にも値しない一個の物質なのだ……」（二十三日、朝）

そしてそれは、地球という星屑のうえで、無意味な人間の生が永遠に繰り返されるという、「永遠回帰」[註6]の認識となってゆく。

「人間というものの持つ防水性。われらもまた、たがいに出あうことなく、またたがいに溶けあうことなく、たがいのまわりを回転しているだけなのだ。ひとりひとりが、自分ひとりで進んでいるのだ。ひとりひとりが、密閉した孤独のなかに閉じこもり、ひとりひとりが、皮袋のなかに閉じこもっているのだ。人生を生きるため、そしてやがて姿を消してしまうために。不断のリズムにつれて、引きつぎ引きつぎ、人は生まれ、人は死ぬ。この世にあって、一秒間にひとりが生まれ、一分間に六十人が生まれる。一時間に、三千以上の嬰児が生まれる。そして、それに劣らぬだけのものが死ぬ！　来る年ごとに、三百万の人たちに代わって、三百万の人間が新しく生まれる。」（二十三日、午後）

しかしアントワーヌは、「永遠回帰」のニヒリズムのなかから、ジャン＝ポールに権力への意識を説き、「超人たれ」と結論するのである。

「自分自身を肯定せよ。文句なしに傲岸たれ。謙譲こそは、人間を小さくさせる寄生虫的美徳にすぎない。（それに、きわめて多くの場合、それは自己の無力にたいする自意識以外の何ものでもないのだ。）思いあがり、謙遜、ともに禁物。強くなろうと思ったら、自分自身強いことを知らなければ。
あきらめたがったり、服従したがったり、人に命令されたがったりすることや、服従をもって得意としたりすることは、これもまた寄生虫的な観念だ……自由をおそれる結果なのだ。自分を大きくしてくれるような美徳を選ばなければ。最高の美徳、それはすなわち精力。自分を偉大ならしめてくれるもの、それは精力をおいてほかにはない。ただし、その報いたるや、すなわち孤独。」（八月二十九日）

私は右の引用文への付言として、勝手に、ニーチェの思想の支柱をなす三つの用語を援用した。それは、また実際に「黒箱の書類」に、かなりしばしばニーチェの名が現われるからである。それを次に挙げてみよう。

たとえば、2 *Individu et collectivité* 中の 2. 14 は、*Nietzsche* : 《Deviens ce que tu es》という一行だけで成っており、**21.** ***Formation philosophique de Maumort*** 中の 21. 8 にはモーモールがニーチェを愛読した痕跡として、**Utilisation de formules…… empruntées à des grands penseurs, Emerson, Goethe, Nietzsche, Jésus-Christ, Confucius, Platon.** とあり、古典的な人名に囲まれて、ただ一つニーチェの名に現代的思想家を代表させている。また、52. *bis. Lectures* の 52. b. 2 では、モーモールがパリに出てその影響を受けるエリック叔父のモデルにしたと考えられるポール・デジャルダンの経歴として、**A quarante ans, Nietzsche : *Au-delà du bien et du mal.* Fruit défendu.** と書きこまれているが、ダスプル氏が「註」のなかで認めているように、デジャルダンのものとしている外国作家の影響は、そのままマルタン・デュ・ガール自身のそれでもあったのである。そしてダスプル氏は、「註」の他の個所において、プレイヤード版『モーモール』の「黒箱の書類」には採取しなかったが、他に393

という書類があって、このなかにはニーチェの『善悪の彼岸』からの覚え書を集めた、小さな手帖が入っていた、と報告している。

　しかし、これらを引き合いに出すまでもなく、本稿前半で長ながと引用した小説テキスト中で、モーモール自身が「秘教主義」そのものについて述べている個所に、ゆくりなくも現れている「ニーチェは、およそ人間類型の完成は貴族社会の産物だ、と断言している…この言葉には異論の余地はない」という文句が（三一ページ）、なによりもよく「秘教主義」とニーチェ主義との関係を明示しているではないか。

　ここで、疾にマルタン・デュ・ガールにおけるニーチェ主義について指摘していた、ひとりの研究家の名を挙げておくのも無益ではないであろう。それは、オランダ人でニュージランド・ウエリントンの大学の教授 **John Vrolyk** 氏であるが、氏はその著 **“Le temps et la mort dans l'œuvre romanesque de Roger Martin du Gard”** のなかで、マルタン・デュ・ガールの作品中に顕れているニーチェ的思想（とくにその超人思想）の影響について力説している。

　氏はまず、マルタン・デュ・ガールが青年時代に傾倒し、処女作品『生成』を献じているジャン・ド・ティナンがニーチェの思想に染まっていたことを認め、ド・ティナンの「人間はいうならば **Übermensch** になる――というか、超人へと歩んでゆくもの、と考える。そして、人間は自我意識に目覚めることにより自己完成するものだ、と思う」「私は傲慢である――私には、自分が軽蔑のよろいを着せた馬に跨がり、凡俗の騎士たちをむこうにまわして、円形闘技場で戦っているような気がする」という文を引用して、マルタン・デュ・ガールのニーチェ主義への近づきを青年期以来のものだとしたのち、次のように述べている。

マルタン・デュ・ガールの全作品を貫いて、ニーチェ主義がすかし模様となって現れており、それは、『エピローグ』のアントワーヌ・チボーがその殉難の終局に近づくにつれて、ますます顕著なものとなってゆく。一九一八年九月七日、これを要するにけっして凡人でなかったこの主人公は、ジャックの遺児ジャン=ポールに書きのこす手帖のなかに、「価値ある人間となること。自己のうちに自我を押し通す個性を発展させること」としるす。そして、そのすこしあと、「ジャン=ポールよ、お前の意志を切り開け。もしお前が意欲することができるならば、不可能なものは何ひとつないのだ」と勧告する。

そして、アントワーヌの信条(クレド)の要約として、すでに私が引用した「自分自身を肯定せよ。文句なしに傲岸たれ……」(本稿二四ページ)という個所を掲げ、

こうして、過去、現在、未来という――時間についての古典的区分が、死との直面において、ニーチェ的モラルの視点で統合されるにいたる。ニーチェ主義的心理学者の列に加わって、マルタン・デュ・ガールはここでは、たとえば『マラヤ』の作者アンリ・フォーコニエとの親近関係にある。

と述べている。私がアントワーヌについてページをさいたのは、「黒箱の書類」の3.19の標題に、**Antoine, aprés la guerre, ou Maumort ?** という、大戦以後の覚醒したアントワーヌとモーモールとを重ねあわせようとする作者の言葉が見られるからである。

加えて想起に価するのは、マルタン・デュ・ガールの主要作品の空間を占める人物たちの多くが、強者の種族に属していたことである。ジャン・バロワにせよ、ジャック・チボーにせよ、アントワーヌ・チボーにせよ、はたまたオスカール・チボーにおいてさえ、そこには自己完成への不屈の意志と、旺盛なエネルギーの発揚が看て取れる。少年

期から死にとり憑かれ、あらゆるものに対して「否」をつきつけたジャックは、生の絶対否定というニヒリズムから片時も離れることなく、しかもつねに、その内在的超越の具体的形式として「何か大きなことに立ちむかうこと」による自己超克以外を考えない。そして、世界を相手にしてのその最後の「役にたつ」「模範としての」行為は、戦争という衆愚を下に見おろす、大空への果敢な飛翔という、壮大な結末をとる。あの優しいフォンタナン夫人すらもが、ひとたび寡婦となり、戦争に誤ってかき立てられると、まるで別人のように支配欲を身につけ、かつてオスカール・チボーの坐っていた権力者の椅子にのけぞりかえって、戦傷者療養所経営のために人びとを顎でつかうのである。また、アントワーヌのさしのべる保護の手を振りきって、ジャン＝ポールをあえて庶子として育てることにより、社会全体を敵にまわして戦いを挑むジェニーは、その意志の強烈さにおいてなみの女性とは比べようもない、猛だけしさをもつ。

それにも拘らずマルタン・デュ・ガールの主要人物たちは、ある大いなる高揚ののち、すべて滅びの運命を辿っていた。それは、この小説家に深く根ざした反英雄主義のしからしめたところである。そしてその反英雄主義は、死に堰きとめられた生というニヒリスティックな人間存在観と、元来ペシミスティックなこの小説家の現実主義者的側面から発していたのである。ところでこれは、たとえばアントワーヌについて述べた超人思想とは矛盾するかに見える。

マルタン・デュ・ガールの反英雄主義は、これまで悲劇的荘厳美を主人公に拒絶していた。しかしその主人公たちが、すべてのものの逝きすべてのもの再び還り来たる永劫回帰のなかで、消滅に抗して肯定の響きを奏でるとき、彼らは、それでも偉大さの尺度なしとせぬ反英雄主義的な現代の英雄となり得たのである。この二十世紀という世紀が強いるパラドックスが、マルタン・デュ・ガールの文学の主調をなしていた。アントワーヌは生きることを「何の名に

おいて？」と自問したのち、永遠回帰のなかに人間をとらえて次のように言う。

なんのために？　それは、過去と将来とのためなのだ。父や子供たちのためなのだ。自分自身がその一環をなしているくさりのためなのだ……連続を確保するため……みずからの受けたものを、後に来る者へわたすため――それをもっと良いものにし、さらに豊かなものにしてわたすためなのだ。（九月十一日）

かくして、**Antoine, après la gueree, ou Maumort ?** として捨象されたモーモールの秘教主義は、マルタン・デュ・ガールの文学の底流にあった超人思想と結びつく。そしてそれは、マルタン・デュ・ガールその人のうちにこそ存したのである。彼はモーモールと同様に、「いつも自分の《秘教主義》を断固として隠しつづけてきた」のであろう。彼のボヴァリスムも、そして、彼の残された命数と体力に見あうことのない『モーモール』の絶望的なほどに巨大な大遺言書的企画も、この自己超克への道から説明がつくと思われる。

マルタン・デュ・ガールは『モーモール』にいたって、ついに、それまでの作品におけるような人格二分割による自己分入の方式をとることなく、彼自身の存在そのもの、もしくは彼自身の内面の秘密なるものをそっくりひとりの中心人物に負わせるという、拡大された全的人間像の樹立をはかることになった。そして、モーモールをできるだけ自分とは異なる人間、自分の外にある人間として客観視する配慮をとりながらも、必然的に、内的自己の最高度の発揚を託すべき人物を創造することに専念したのである。ではなぜ、自分の外にある人間とするために、貴族の血をひく軍人という身分にしたか。それはひとえに、このたびは、人生最終の段階にあたって、それまでの抑制を解き、貴族主義を最適の土壌とする「秘教主義」をここ堂々と顕示するという欲求に押されたからではなかろうか。それらの

ことを、「黒箱の書類」は私たちに明瞭に語ってくれるのである。「すでにこれがどんな《大いなる人間像》になりうるかが目に見える」（本稿一〇ページ）と彼が書いていたその人間像は、このような特性すなわち、作者自身の穏和主義に和げられたニーチェ主義的思想を賦与されているがゆえにこそ、大いなるものとなる筈だったのではなかろうか。

ダスプル氏は “Les Dossiers de la Boîte noire” の Notice に次のように記している。

Mais il faut ajouter que, pour l'écrivain, ces dossiers avaient une valeur, une portée très générales : sur bien des points essentiels, il est certain que les notes de la boîte noire expriment le fond de sa pensée. C'est pourquoi R. Martin du Gard a souhaité qu'après sa mort ces dossiers soient confiés à Daniel de Coppet, dans l'espoir que son petit-fils trouve profit à lire ce recueil de réflexions, de notations accumulées au cours de toute une vie.

すなわち、「黒箱」の覚え書は、ちょうど死を目前に控えたアントワーヌ・チボーが『エピローグ』のなかで、甥のジャン＝ポールのために「日記」を書き残そうとしたのと同じ精神をもって、老境を迎えたマルタン・デュ・ガール自身が、終わりなき永遠回帰のなかで、「おれのすべての将来、世界のすべての将来は、一にあの子の中にある」と考えた最愛の孫ダニエル・ド・コペ氏に、「この自分というものの、せめてわずかだけでも残しておきたいといった気持」で書き残したものなのであろう。（括孤内はアントワーヌの言葉）

今回この書の翻訳について論議が交わされていたとき、編者のダスプル氏は私に、あまりにも大部な「黒箱の書類」をどのように扱うかについて、「**Et il faut que je tienne compte de l'opinion de Daniel de Coppet et de l'éditeur français (de Gallimard). Tout cela est un peu compliqué!**」と書いて、ド・コペ氏がこれら書類の訳出に固執していることを伝えてきた。「黒箱の書類」には、マルタン・デュ・ガールの思想の根底と、みずからの瞬時の存在の意義を後世に伝え送りたいという、切なる意図とがこめられているのである。

註

（1）拙著『ロジェ・マルタン・デュ・ガール研究』（三修社）、p. 637～p. 640

（2）p. LII

（3）**Au moins trois ans.** とは、小説家の死後少なくとも三年は触れることのないようという意味である。

（4）リシャール・ド・スーシェールという障害者の青年、恋人を主人公アンドレに失われる。

（5）拙訳『文学的回想』p. 92

（6）ニーチェに関する用語は、『世界の大思想』II—9、原佑記『ニーチェ・権力への意志』に従う。